

メディアと文化の 日韓関係

相互理解の深化のために



奥野昌宏・中江桂子 編

「近くて遠い国」を脱するには？

メディアは日本と韓国の相互理解に役立っているか。

文化交流は真の理解につながるか。

メディアと文化を中心に、日韓関係を位置づけなおし、

相互理解の深化をめざす。

新曜社

メディアと文化の 日韓関係

相互理解の深化のために

奥野昌宏・中江桂子 編

新曜社

まえがき

私たちは他者とどのように向き合い、どのように相互理解を深めるべきなのか、そしてどうすればそれが可能なのか、私たちの思考の出発点はそこにある。

誰もが抱えるこの素朴な問いにたいして的確に答えるのはそう簡単なことではない。ましてそれが国家と国家あるいは国民と国民の間で、ということになるといっそう困難さが増す。拠って立つ歴史や文化の規定性がより複雑になり、そのことによってステレオタイプの効用が高まってしまうからである。一人ひとりの知識や経験は多様であっても、集合状況においては、ともすれば個別性が埋没しやすくなる。社会には多様なディスコースのやりとりがあり、それが時に融和を生み出し、あるいはさらなる葛藤を惹起させる。国家間の歴史問題についてはその振り幅が大きくなりがちであり、やりとりは闘争の趣きをきたししやすい。歴史的事実と歴史認識は別であるとの考え方もあるが、現実にはそう単純に分けることができない。なぜならば「事実」の確定には価値観に裏打ちされた「認識」が不可避に存在するからである。

ディスコースのやりとりにおいて重要な位置にあるメディアが、融和の産出に寄与する場合もあるが、葛藤の増幅力として働くこともあり、このことが問題の解決を遅らせたり、相互理解の妨げとなることさえある。このことは、「近くて遠い国」と長らく称されてきた日本と韓国の場合も同様である。ここにいる相互理解とは、同じ見方、考え方になることを指すわけではもちろんない。安易な同一化はむしろ危険でさえある。それと同時に、いたずらに違いを強調し過ぎることも避けなければならない。違いを誇張することは排他性に繋がり、それは攻撃性を助長しかねないからである。相互理解はいうまでもなく社会的関係性のなかにあり、その関係性には正負あるいは異同の両面が存在する。そのことを前提にして先入観を捨て、互いに真摯に向き合うことでしか相互理解はありえないのである。

さて2015年は、戦後、すなわち日本の植民地支配終結から70年、日韓基本条約の締結から50年目にあたる節目の年であった。しかし両国関係はけっし

て良好ではなかった。これに先立つ2012年夏の李明博^{イ・ミョンバク}韓国前大統領の竹島（独島）上陸を契機に両国関係は極度に悪化したのである。さらにその後も安倍晋三政権と朴槿恵^{パク・クネ}政権との関係は冷え込み続け、日韓関係は長らく悪化したままであった。また政権同士の軋轢のみならず、たとえば、日本では一部のメディアが「嫌韓」を売り物にし、ネットのなかには「嫌韓」と「反日」が溢れた。その多くは健全な「批判」ではなく、故なき「誹謗」であり、相互理解とは逆方向のベクトルをもっていた。日韓両国のコミュニケーションは、従来の政治やジャーナリズムあるいはマス・メディアの範囲を超えて、大衆文化やネットを通じた市民レベル、草の根レベルにまでおよぶ広範で多層的に展開される時代となったが、この状況が相互理解にとって両義的であるのも現実である。

このように混迷する現実を踏まえながら、日韓関係をメディアと文化の側面からとらえなおすという企図により、成蹊大学アジア太平洋研究センターのもとに研究プロジェクトが立ち上げられた。本書は2012年度から3カ年実施されたこの日韓共同プロジェクト「日韓比較メディア研究——情報と文化の位相」の研究成果である。

プロジェクト・メンバーは、以下のとおりである（五十音順）。

日本側：市川孝一（明治大学）、大石裕（慶応義塾大学）、奥野昌宏（成蹊大学：代表者）、小林聡明（日本大学）、鈴木雄雅（上智大学）、田中則広（NHK）、蔡星慧（学習院女子大学）、中江桂子（成蹊大学）。

韓国側：李鍊（鮮文大学校）、金政起（韓国外国語大学校）、金泳徳（韓国コンテンツ振興院）。

なお、本書を編むにあたっては、上記メンバーのほか、森類臣（立命館大学）、崔修南（慶應義塾大学院生）、文嬾珠（韓国放送通信審議委員会）、白承赫（韓国コンテンツ振興院）の各氏に執筆を願った。

日韓両国のメディアや文化にかんする比較研究はここ十年余り積極的に行なわれているし、関連の書籍や論文もかなりの数が公刊されている。ただ内容面からみると、いわゆる「韓流」を中心とする現代のメディア文化に関連するものが多くを占めているように思われる。こうした実状に鑑み、本書では同種の内容を含みつつも、できる限り歴史的視点を反映させるように配慮した。またメディアについては機械装置としてのメディアだけでなく、メディアとしての人間の営為にも注目した。さらに相互理解にとって正のベクトルをもつ事象だ

けでなく、コンフリクトをなす歴史的事象も取り扱われている。なぜならば、仮に相互理解が実現するとすれば、それは歴史的な積み重ねのなかにおいてのみであり、またその過程においては常に負のベクトルも現出するからである。と同時にまた、負の状況にあっても時に大勢に抗う人間の力にもあらためて目を向ける必要があるだろう。こうした考えがいささかでも本書に実現しているならば執筆者一同うれしき限りである。

前半の第6章までの論考は、主として日韓の文化史上のトピックや大衆文化の相互交流の現状を通じて、歴史との向き合い方や相互理解への道筋をどうとらえればいいのか、といった点について論じたものである。また、後半の第7章以降は、戦後の政治体制やメディア・言論状況のもとで展開されたメディアの政治、ナショナリズム、その結果としての相互理解の正負の展開についての論考が並んでいる。テーマや視座・射程はそれぞれ異なるが、日韓関係における事実はいかに形成されているか、メディアは社会をどのように伝えているのか、理解の物語はどのように構築されるか、などの問題について、文化とメディアあるいはジャーナリズムの視点から考察したものである。私たちはその多様性と多角性を大事にしたいと考えている。そもそも異質な立場を尊重する相互理解とは、単純で「わかりやすい」総括を警戒し、むしろ「わかりにくさ」を大事にする、ということを通じてしか実現しない。単純なわかりやすさに従うことが、じつは多くの犠牲を支払うことになるのだと、私たちは日韓の歴史から学んできたのである。単純な結論を安易に求めず、真摯に実直に相互に向き合う姿勢こそが、すべての政治的打算を凌駕して相互理解に向けた一歩を加えることになるのだと考える。

先に触れたとおり、この研究プロジェクトの実施については、2012～2014年度の3カ年にわたって成蹊大学アジア太平洋研究センターの助成を受けた。その成果として本書を成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書の一冊として上梓できることにたいし、同センターにあらためて謝意を表したい。またプロジェクトの遂行過程で両国の多くの研究者やジャーナリストから貴重なお話を伺うことができた。それらが研究や執筆をするうえで大いに役立ったことは言うまでもない。ここでは逐一お名前をあげることは省略するが、すべての協力者にたいして心から感謝したい。さらには、出版事情が厳しい折から本書の刊行を承諾された（株）新曜社と繁多な編集業務を一手に引き受けてくださった

同社編集部の高岡謙一さんに衷心よりお礼を申しあげたい。

2016年1月

編 者

目 次

| | | |
|--|------|----|
| まえがき | 編者 | 3 |
| 第 1 章 朝鮮の美を見つけた日本人のパイオニアたち | | |
| | 金政起 | 13 |
| 1 はじめに | | 13 |
| 2 柳、浅川兄弟、そして朝鮮陶磁の美 | | 15 |
| 3 民藝論の「実験場」としての朝鮮民族美術館 | | 20 |
| 4 おわりに | | 24 |
| 第 2 章 工芸家たちの「もうひとつの近代」 ——国境を超えた文化活動の記録として | 中江桂子 | 28 |
| 1 はじめに | | 28 |
| 2 工芸家たちの「もう一つの近代」をめぐって | | 29 |
| 3 文化を守るための装置 | | 33 |
| 4 柳における博物館思想の発展 | | 39 |
| 5 おわりに——相互理解への長い道のり | | 43 |
| 第 3 章 日本における韓流の経緯と現状 | 金泳徳 | 50 |
| 1 はじめに | | 50 |
| 2 韓流と日本 | | 50 |
| 3 韓流ブームの経緯 | | 51 |
| 4 韓国ドラマと K-POP の現状 | | 53 |

- 5 おわりに——韓流の今後 60

第4章 もう一つの韓流ブーム

——韓国歴史ドラマ・ブームについての覚書 市川孝一 63

- 1 はじめに——ブームへの注目 63
- 2 韓国歴史ドラマ・ファンへの道 66
- 3 韓国歴史ドラマとは 67
- 4 なぜ、中高年男性に受けるのか? 74
- 5 おわりに 77

第5章 インターネットを通じた日本大衆文化の受容現況と特徴

文嬾珠・白承嫻 88

- 1 はじめに 88
- 2 日本大衆文化に対する開放政策とメディア環境の変化 89
- 3 研究内容および研究方法 93
- 4 インターネットを通じた日本大衆文化の受容状況 95
- 5 日本大衆文化の受容特性と日本大衆文化開放政策への影響 100
- 6 おわりに 112

第6章 戦後日韓関係の相互認識をめぐる言説

——記憶の再生産と認識の相違を超えて 蔡星慧 115

- 1 はじめに 115
- 2 帝国の記憶、不遇の連続性 116
- 3 新保守主義を超える文化言説 119
- 4 拒否から受容へ 122

- 5 むすびに代えて——新たな談論に向けて 127

第7章 韓国の博物館における日本の表象 中江桂子 130

- 1 文化は解放されたのか 130
- 2 柳宗悦展という挑戦 134
- 3 記者会見というディスコミュニケーション? 138
- 4 ジャーナリズムのなかの言論封鎖
——文化財の政治的利用をめぐる 140
- 5 歴史的トラウマを超えて 143

第8章 1970-80年代における韓国の対日情報発信
——対外広報誌『アジア公論』を中心に 田中則広 146

- 1 はじめに 146
- 2 韓国弘報協会の設立経緯と『アジア公論』の概要 147
- 3 『アジア公論』の主要テーマと量的変化 149
- 4 1973年における『アジア公論』の情報発信 153
- 5 1980年における『アジア公論』の情報発信 159
- 6 1987年における『アジア公論』の情報発信 164
- 7 おわりに 170

第9章 1998年韓日首脳共同宣言以後の情報・文化交流に
ついて 李 鍊 174

- 1 はじめに 174
- 2 金大中大統領在任中の韓日関係 176
- 3 盧武鉉大統領在任中の韓日関係 180

- 4 李明博大統領在任中の韓日関係 184
- 5 アンチ韓流と「嫌韓」の潮流 186
- 6 韓日関係改善策の模索と提言 190

第10章 日韓両国民の相互意識とメディア 奥野昌宏 195

- 1 日韓関係の近景 195
- 2 相互意識の現状 197
- 3 メディアの位置 205
- 4 メディアの今後 209

第11章 韓国における代案言論メディア創出のダイナミズム ——言論民主化運動の系譜から 森 類臣 215

- 1 はじめに——問題の所在 215
- 2 朴正熙政権による言論弾圧と言論民主化運動 219
- 3 全斗煥政権による言論弾圧と言論民主化運動 225
- 4 『ハンギョレ新聞』の創刊 231
- 5 インターネット新聞『オーマイニュース』登場 234
- 6 李明博政権のマスメディア掌握と代案言論メディア 235
- 7 おわりに——言論民主化運動の系譜から見る代案言論メディア

241

第12章 朴正熙政権下韓国の外信メディア統制——読売新聞ソウル支局閉鎖の展開過程を中心に 小林聡明 254

- 1 はじめに 254
- 2 第一次閉鎖：1972年9月8日～同年12月6日 255

- 3 第二次閉鎖：1973年8月24日～1975年1月10日 261
- 4 第三次閉鎖：1977年5月4日～1980年1月15日 269
- 5 おわりに 273

第13章 日韓両国のメディア・ナショナリズム—— 2014年8月、竹島／独島問題を事例として 大石裕・崔修南 278

- 1 はじめに——日韓関係とメディア・ナショナリズム 278
- 2 竹島／独島問題の新聞報道(1) 2014年8月11～12日 281
- 3 竹島／独島問題の新聞報道(2) 2014年8月13～16日 284
- 4 竹島／独島問題の新聞報道(3) それ以降の批判の応酬 286
- 5 考察——争点連関と歴史認識の観点から 289

装幀・虎尾 隆

第1章

朝鮮の美を見つけた日本人のパイオニアたち

金政起

1 はじめに

今、日韓関係は朴槿惠政権パク・クネになって最悪の状況であると、日韓に詳しい専門家たちが懸念している。日韓関係は常に浮き沈みの歴史のなかにあった。金大中政権キム・デジュンになり、1998年には金大中－小渕の日韓共同宣言以降、両国の関係は善隣関係に回復されてきたようにみえた。続く2002年にはKBSドラマ『冬のソナタ』がNHKで放映され、人気が高まるにつれ、日本全国いたるところで「韓流」ブームが大衆文化を染めた。韓国側でも、金大中政権が韓国における日本の大衆文化輸入を許容したことをきっかけとして、大衆文化の日韓交流が相互拡大し、これが両国の相互理解に貢献したことは言うまでもないだろう。

しかし、李明博政権イ・ミョンバクになって小康状態だった日韓関係は、彼の退任直前におこなった突然の独島（竹島）訪問と日本の天皇謝罪要求発言により、それ以降は冷え込みはじめた。朴槿惠政権に入ってから慰安婦問題も重なり、関係改善の道筋は見えない。右翼性向の安倍政権になって、両国の歴史認識の差はますます広がり、日韓関係は悪化する一方である。

この状況を改善する方法はないのであろうか。この問題に対して日韓に詳しい専門家たちが様々な提案を出している。私は、常に浮き沈みがある政府対政府の関係によるだけでなく、民間レベルの日韓間文化交流のなかに改善への可能性を探ることこそ、最も効力のある処方と考える。だからといって、国家の役目がないわけではない。たとえば、安倍政権は極右性向の在特会（在日朝鮮人の特権を認めない会）が「朝鮮人の野郎、死ぬ」という人種偏見を吐き出しているのに、これを放置しているのは文明国の姿勢ではない。表現の自由は無限ではない。国際的に認められる普遍的な価値を正面から裏切る状態を放置

すれば、もしかすると日韓民族間の感情の溝がさらに深まる懸念もある。

韓国では2004年初めから日本の大衆文化を開放しているので、今では地上波チャンネルを除く放送のなかに日本の大衆文化がいたるところに見られる。とはいえ、まだ日本のドラマとアニメの場合は、地上波放送では見ることができない。これは両国間の文化の流れを妨げる人為的な壁といわざるを得ない。両国間における文化交流のチャンネルを広げることに国家が積極的に取り組むべきである。

このような観点から奥野昌宏教授が主導する本プロジェクト「文化とメディアの日韓関係」が日韓関係の正常化に貢献することを期待している。奥野教授は研究目的について、「日韓両国におけるメディア環境と情報文化の生産と受容の実情を明らかにし、そこから得られた見解を通じて両国の相互理解に貢献することを目的にする」と言っている。

私は本稿で、過去の軍国主義の日本が朝鮮を占領した時、植民地時代の何人かの日本人の知識人たちが朝鮮総督府の植民政策にかかわらず、またはそれに対抗してむしろ朝鮮の文化主権を宣揚した事例を明らかにする。

1910年に朝鮮を合併した日本帝国主義は、1930年代にはいると中国の侵略を始めるが、これは日本が覇権主義的な軍国主義にエスカレートすることを意味した。対朝鮮の歴史をみると、1919年の独立運動を機に名目的に掲げていた、いわば「文化政策」の看板まで取り止めて、露骨な朝鮮文化の抹殺政策に入る。朝鮮の歴史を消すことを基本的立場とし、創氏改名をはじめ朝鮮語を枯死させるための画策にも走る。しかし私を取り上げようとする知識人たちは、この政治的に厳しい期間にわたって活動し、かつ、朝鮮文化の抹殺政策に対抗して戦った日本人たちである。

その日本人とは柳宗悦^{やなぎむねよし}、浅川伯教^{のりたか}・浅川巧兄弟、金沢庄三郎である。柳と浅川兄弟など柳同好人は、1920～30年代に朝鮮陶磁器の美を通じて「美の朝鮮」を見つけた人たちである。私は近年出版した『美の国朝鮮』（ハンウル、2011）において彼らを取り上げたが、本稿ではいくつかの資料に基づいて、彼らの他の姿を加えて論じたい。柳は彼が見つけた朝鮮の陶磁美をモチーフにして民藝理論を完成する一方、実践家として民藝運動を創導した。柳の民藝理論は社会疎通理論としてだけではなく、日韓の文化交流を支える、理論的な潜在力となったことを評価したい。

金沢庄三郎が著わした『日鮮同祖論』は、朝鮮語と日本語が同じルーツ（同系）だというテーマを提唱した本である。もちろん彼の『日鮮同祖論』も日帝の朝鮮強占を合理化する論理で、軍国主義者たちが利用した側面は忘れるべきではない。しかし、この側面を除くなら、日韓「同祖論」自体が吟味されることなく「悪の種」とされてはならない。日本の考古学の編年史で命名された、「弥生時代」（紀元前8～7世紀前後から紀元後2～3世紀頃まで）以降、水稻耕作が青銅文化とともに朝鮮半島の南部から日本へ渡ってきたことは、すでに文献史学や考古学的にも考証済みの事実である。弥生文明は今日の日本文化の重要なルーツのひとつであることは否定できない。これをはじめとする様々な文化交流が考古学的時代からすでに存在しているが、それを基礎として、日本と朝鮮半島の双方は、それぞれの歴史を積み重ねてきたことを認めなければならない。このような視点からみるならば、日韓「同祖論」は、日本帝国主義が掲げた「内鮮一体」という過去の政治の一時期の枠組みに拘束された理論というよりも、より大きな歴史的背景から理解すべき理論であると考えられる。このような過去の一時期の政治的枠組みから離れて、あらためて捉えなおしてみるなら、金沢の『日鮮同祖論』は日韓の文化のありようを我々に考えさせる、パイオニア的な洞察ではないかと考える。

しかし、私はここでこの深いテーマを深刻に取り上げるつもりはない。本稿では主に、朝鮮民族にとって暗闇の植民地時代のなかで、柳同好人たちが朝鮮の美を再発見し、それを日本の「民藝」と結びつけ、日韓の文化と連携した過程に焦点を置きたい。その上で、柳が提唱した民藝理論が日本社会における社会疎通理論としてだけでなく、日韓の文化交流を活性化させる理論的な潜在力を持ったことを提示したい。

2 柳、浅川兄弟、そして朝鮮陶磁の美

2-1 柳と朝鮮陶磁との出会い

ここでは柳宗悦（1889～1961）が提唱した民藝論と朝鮮との関係を考察する。彼は近世日本が生み出した天才的な文士であり、民藝理論の唱道者である。彼は茶人、古美術のコレクター、批評家、または宗教哲学者とも呼ばれ、幅広い活動範囲をもっているが、私はここでは特に、彼が提唱し、直接飛び込んだ民

藝運動の理論家、実践家としての顔に注目したい。この彼の一側面に、朝鮮陶芸とのかかわりが大きく横たわっていることは見逃せない。これは、日韓間の文化に共鳴しうるものがあることを裏づける重要な事例として価値があり、私はおおいに注目している。次第に明らかになるであろうが、彼が主導した民藝運動は朝鮮陶磁器の美がモチーフになったものである。

では、彼が見つけた朝鮮陶磁器の美の本質とは何か。これに基づいた民藝の概念とは何か。結論からいうと、民藝論こそ日韓文化が決して「他者」ではなく、共通の母胎から生まれたことを見せてくれる明らかな事例なのである。

まず、柳がどのように朝鮮陶磁の世界に目覚めたのか、その過程を振り返ってみる。柳は元々朝鮮とは縁のない、西洋の天才的な美術人などをとりあげる雑誌『白樺』の中心的担い手であった。しかし、彼は偶然朝鮮の陶磁器を見て、彼の美意識がそれこそペルニクス的に変わったのである。

柳の美意識は1913～14年朝鮮半島に渡った浅川兄弟の目を通じて形成される。彼らのような案内者がいなかったら、柳は朝鮮美術どころか、朝鮮に対する関心もそれほど深く持つことはできなかったであろう。柳が朝鮮の陶磁器に目覚めるようになったのは1914年9月、彫刻家を目指していた浅川伯教が朝鮮からお土産に持ち帰った青華白磁の壺を見たことに由来するといわれる。その2年後、朝鮮に入り、彼の弟、巧と交友を持つことで、朝鮮陶磁の世界へ本格的にかかわることになる。ここから、彼がのちに日本で民藝という新たな美学を着案し、民藝運動を提唱するようになった発源地が朝鮮陶磁の世界だったことがわかる。

柳は伯教が持ってきた青華白磁の壺（染付秋草文面取壺・カバー写真参照）を見て、『白樺』1914年12月号に次のような感動を打ち明けており、彼がいかに新たな美の世界に「驚愕」したかが推測できる。

自分にとって新しく見出された喜びの他の一つを書き添えよう。それは磁器に現はされた型状美（shape）だ。之は全く朝鮮の陶器からを得た新しい驚愕だ。嘗て何等の注意をも払はず且つ些細事と見做して寧ろ軽んじた陶器等の型状が、自分が自然を見る大きな端緒になるとは思ひだにできなかった……自分のしり得た範囲では此型状美に対する最も発達した感覚を持った民族は朝鮮人だ。

このような朝鮮の青華白磁との出会いは、柳の朝鮮美の世界への入り口となった。その後、柳は浅川巧と交友しながら朝鮮美の世界を見つけたのである。彼は朝鮮の美を様々な形で表現しているが、ここには荘厳な美、グロテスクな美（1916）、偉大な美（1920）、意志の美、偉力ある美、地に横たわる安泰な鞏固な美（1922）などがある。彼は陶磁史で高麗朝と朝鮮朝を比べて、高麗の作りに女性の美があるとすれば、李朝の作りには男性の美があるとも言った。

もちろんここには彼の植民史観と批判される「悲哀の美」もある。しかし、柳はこの「悲哀の美」という見方を1920年代後半から次第に克服しはじめ、「健康の美」に変えていくことがうかがえる。例えば、1922年に書いた「李朝陶磁器の特質」では、朝鮮美の特色を「悲哀」といいながらも、その時点ですでに李朝の意味に対して意志の美、男性の美とも表現しているのである。

柳の朝鮮美観が最もよく表われているのは「喜左衛門井戸をみる」（1931）の文章である。柳はこの茶碗を見て即座に言う。「いい茶碗だ。だが何という平凡極まるものだ……何一つ飾りがあるわけではない。何一つたくらみがあるわけではない。尋常これに過ぎたものとしてはない。凡々たる品物である」。彼は続けて、「それは朝鮮の茶碗だ。それも貧しい者たちが普通に使うものだ。本当に下手物だ。典型的な雑器だ」と言う。ここで彼は、一切飾りのない、操作のない自然そのままの美に基づく民藝の美に気づかされたのであり、それが具体的には朝鮮の美によることがわかる。

2-2 不均衡の美

もう一つ、柳が朝鮮美の特色に見つけたのが不均衡の美である。これは定型の美ではなく、破型の美である。これは彼の思想が、奇数の美、侘び寂びの美学に発展していくきっかけになったものである。

柳は、青華白磁の飾り気のない紋様「秋草文」の美を見出し、朝鮮の粉青沙器というジャンルに心酔した。柳は、かつて浅川伯教が持ってきた青華白磁の壺に「染付秋草文面取壺」と名づけたことを始発点として、彼の民藝理論が生まれたのである。「秋草文」というジャンルは柳の美意識をよくあらわしており、議論する意味があると考えられる。それにたいして、現代日本の代表的な民藝論の批判者である出川直樹は柳の「悲哀の美」の理論と関連させて、柳のこの命名を批判している。

はたして柳は「悲哀の美」と結びつけて朝鮮の青華白磁の壺に「秋草文」と名づけたのであろうか。出川が主張する主な争点は以下である。すなわち、「秋草文」とは、日本で平安時代以降様々な部門の工芸紋様で広く使われたものであり、「どこにでもある菊、ススキ、萩、キキョウ、オオバコなど秋草だけを描いている」という。ところが、朝鮮の青華白磁の「秋草文」を調べてみると、5月頃に咲く菖蒲の花がある。また「秋草文」のなかで代表的な文様となっている蘭も、春から夏にかけて咲くのが多く、秋の草ではない。すなわち、朝鮮の青華白磁「秋草文」には秋草だけが描かれているわけではないのに、秋の寂しい風景を「悲哀の美」に結びつけるために、柳は意図的に「秋草文」と名づけた、というのである。

果たしてこのような主張は正しいのであろうか。しかし、秋草文を専門的に研究した肥塚良三こえづかよしぞうによると、広義的には菊、梅、喋喋などを描いたのも秋草文に含まれるというのである。柳が「秋草文」と名づけた背景がわかる資料は『白樺』1922年9月号に掲載された「挿絵の説明」である。彼は秋草文の壺に対する挿絵の説明で「野菊」という秋の草を挙げ、()のなかに「時々蘭、ナデシコ、梅と竹が加わる」と説明している。

肥塚は1988年「李朝秋草文展」を機に秋草手(秋草文)について次のように言う。

例えば、豪華絢爛な牡丹は、人目をひく春の花の代表となり、野辺や庭先で可憐な花を咲かせる秋草は、己の美しさを誇示するでなく、人知らず咲き、人知らず散ってゆく、はかない抒情をもつ花となった。そして、後者の場合、そのはかなさゆえに自然の情趣を理解する「心ある人」がみれば、秋草は牡丹に劣らぬ、殊の他美しいものと理解された。こういった美意識のとらえ方は、つまるところ外見の美しさではなく、その奥にある内面の美を汲みとろうとする態度である。

これは柳が彼の美意識のなかに、秋草文を加えたことを説明する内容であることに間違いはない。すなわち、悲哀の美と関わって秋草文を取り入れたことこそ、出川の意図的なものに見える。

2-3 浅川兄弟

次に、柳を陶磁器の世界へ導いた浅川兄弟とは誰なのか。兄の伯教は1913年の日帝時代にソウルの南大門の近所のある小学校教師に赴任し、朝鮮に入って彫刻家を夢見た若い芸術家であった。その芸術家の目に朝鮮陶芸の美が入ったのは、ある意味偶然ではなかったのであろう。彼は後に朝鮮の白磁壺に出会った経緯を振り返りながら、「ある日の夜、京城の古物商の前を通ってみると……朝鮮の物の中に白い壺一つが灯の下で輝いていた」といい、「ほんのりして、膨らんだ、丸いものに惹かれ、しばらく覗いてみた」という（浅川1956）。

彼はこの白磁壺を入手し、「高麗青磁が過去の冷たい美としたら、この白磁は現在の自分の血が通じる、生きている友だ」という。この器もやはり柳を感動させた青華白磁であった。このように朝鮮陶磁器の美に目覚めた伯教は、日本人の学者やコレクターたちの中で「朝鮮陶磁の神様」というあだ名を得ようになる。日本人のコレクターたちの中で「三島」と呼ばれる朝鮮粉青沙器の美も、彼が発見した。彼は朝鮮陶磁器の近代性を指摘し、その例に粉青沙器の伸びやかな器型や、自由奔放で幾何学的な紋様を挙げている。これが柳の朝鮮陶磁観に伝わったとっていい。

弟の巧は兄を追って1年後の1914年朝鮮に渡った。彼は兄伯教が見つけた朝鮮陶磁器の美を共有しただけではなく、もっと大きな見地から朝鮮人の生活の中へ飛び込んで土着文化を内面化させた、当時では珍しい日本人であった。彼は朝鮮に渡ってきた多くの日本人とは違って朝鮮語を覚え、朝鮮人と心から付き合う「友」になったのである。

巧は朝鮮の土着文化を内面化させた数々の文章を残したが、そのなかでも『朝鮮の膳』と『朝鮮陶磁名考』は力作である。『朝鮮の膳』は彼が朝鮮人の使う日用品に親しむなかで朝鮮の美を発見したことへの言及であり、現場における研究の成果である。この著書を読むと、彼がどのように朝鮮人の生活に密着し、美意識を悟ったのかがわかる。「正しい工芸品は使用者の手によって次第にその独特な美が発揮される」といい、「したがって、ある意味で使用者は美の完成者」ともいう。彼は具体的に、「朝鮮の膳は純美端正したものでありながら、私たちの日常に近く奉仕し、歳月とともに優雅な趣を加えていくことで、正しい工芸を代表する」といった。